批評・紹介

河内良弘著
明代女眞史の研究

松浦茂

一

中國東北部の歴史に關する研究は、日本においては東洋史學の黎明期とともにすでに始まっていた。そして生まれたばかりの東洋史學が、實證主義の學問として成長するために強力な牽引役を果たしたことは、周知のとおりである。多くの先達たちが優れた仕事を殘したが、中でも歴史地理の研究は有名である。戰前にこの分野で達成された業績は、いまなおその價値を失っていないし、論證の過程で培われた方法論は、後に續く研究の手本となったのである。

しかし戰前において東北史の研究が興隆した背景には、日本の大陸侵略という政治狀況があった。敗戰を境にして研究の熱は急速に冷えて、研究者の人數は激減してしまった。それ以來今日まで中國東北部の歴史研究は、東洋史學の中ではもっとも地味な分野の一つになっている。最近では滿洲語檔案に關する研究の重要性が叫ばれて、それを見なおす氣運も生まれてはきているが、全般的に見れば、今後ともその狀況に大きな變化はないであろう。だが立場を變えてみれば、現狀こそが正常なのであって、悲觀するにはあたらない。

さて本書の著者である河内良弘氏は、戰後早くに研究を開始されているが、以來一貫して中國東北部に住む少數民族の歴史、とりわけ明代の女眞史を中心に研究を進めてこられた。研究の初期には『明代滿蒙史料』（明實錄抄）の編纂事業に從事されたこともあり、さらに近年には滿洲語檔案の研究や、滿洲語文語文典の編纂作業を精力的に行なっておられる。著者がこれまで歩まれた道は、戰前の研究の單なる延長線上にはない。戰前における成果を踏まえながらも、それに止まることなく、新しい女眞史研究を創造するために前進されてきた。著者が取り組まれた研究の中心テーマは、戰前に闊歩した歴史地理の研究ではない。女眞人の側に立って、かれらの社會やその活動を明らかにすることであった。こうしたテーマや研究方向は、戰後の研究者に課せられた緊急な課題であったのである。このたび著者が永年の研究をまとめて本書を刊行されたことは、學界を裨益することきわめて大きく、心からお慶び申し上げたいと思う。

本書の構成は二部二十一章からなり、それに序章・あとがき・年表・索引を合わせると、ゆうに八百頁を越える大作である。本文となる二十一章は既發表の研究論文を基にしているが、收錄にあたってはかなり手が加えられている。全體の章立ては以下のとおりである。

第Ⅰ部　明代女眞をめぐる國際環境
第一章　建州左衛の對外關係
第二章

第三章　楊木答兀の事件について
第四章　建州衛の對外關係
第五章　李朝初期の女眞人侍衛
第六章　移住と農業
第七章　兀者衛に關する研究
第八章　忽剌溫兀狄哈の朝鮮來朝
第九章　土木の變と東北
第十章　朝鮮世祖の事小主義とその挫折
第十一章　申叔舟の女眞出兵
第十二章　女眞人の朝鮮上京について
第Ⅱ部
第十三章　趙三波集團
第十四章　成化三年の役
第十五章　成化十五年の役前後
第十六章　朝鮮成宗の東京城出兵
第十七章　阿速江衛について
第十八章　貂皮貿易の展開
第十九章　燕山君時代の朝鮮と女眞
第二十章　中宗・明宗時代の朝鮮と女眞
第二十一章　建州三衛の消滅と新勢力の擡頭

本書の目的は、大きく言って三つある（あとがき）。第一の目的は、當時の複雑な國際關係を明らかにして、女眞獨自の外交的立場を考えることである。一般に從來の研究は明と女眞の關係史に偏っており、朝鮮と女眞の關係は十分に研究されていない。そのために著者は明の女眞政策と並んで、朝鮮の女眞外交を解明することに研究の重點を置く。

第二の目的は、十五世紀後半以降に顯著になった女眞人の商業活動、とりわけ明・朝鮮兩國との貂皮交易について考察することである。遼東馬市一般に關しては、すでに相當な研究の蓄積があるが、他方同時期の朝鮮と女眞の交易については、少數の研究が行なわれたにすぎず、まして貂皮交易を專門に扱った研究となると、ほとんど存在しない。さらに著者は商業の問題と並行して、女眞の農業についても考察を進める。

第三の目的は、海西女直と野人女直の問題を考えることである。これらの女眞に關しては、十七世紀初めの時期を除けば、これまで檢討されたことがない。第二の問題と同樣に、この問題もまた、未開拓の領域である。

以下これらの點に沿って、各章の內容を紹介することにする。

二

第一章「明代女眞をめぐる國際環境」で著者は、十三世紀後半から十四世紀初めの東北アジアにおける國際關係の枠組みを提示する。元朝を滅ぼして中國本土を統一した明は、洪武帝のときに殘存勢力を追って遼東地方を占領したが、東北全體を回復・維持することはできず、女眞に對する影響力は低下した。これに對して永樂帝は積極策に轉じたので、來朝する女眞が激增する。永樂帝はかれらを羈縻衛所に編成して朝貢させたが、こうした統治體制は華夷を峻別する中華思想の世界觀に從ったものであった。一方朝鮮半島でも同じ時期、高麗に代わって朝鮮（李朝）が成立し、東北國境方面への展

開をはかっていた。明と朝鮮兩國の利害が東北部をめぐって衝突する中で、東北アジアの複雑な國際關係が形づくられることになった。

第二章「建州左衛の對外關係」は、十四世紀後半から十五世紀前半までの建州左衛の歴史を述べた論文である。たいへんな勞作であるので、重要な點についてのみ紹介する。初め牡丹江河口附近に居住した童猛哥帖木兒たちは、一三八五年（辛禑十一）以前に朝鮮國境に近い豆滿江沿岸の阿木河（會寧）に移住したという。猛哥帖木兒の歸屬をめぐっては、明と朝鮮の雙方がつなひきを演じて、明側に軍配が上がったが、朝鮮と猛哥帖木兒との關係は、それがもとで斷絶してしまった。猛哥帖木兒が明の羈縻下に入った結果、朝鮮と童猛哥帖木兒とは宗主國明に對して對等となり、朝貢關係にも似た兩者の關係は、繼續することができなくなったのである。また一四三三年（世宗十五）に非業の最期をとげた猛哥帖木兒に代わった凡察は、建州左衛の內部を掌握できなかったので、その閒隙をついて朝鮮は阿木河の一角に會寧鎭を置いて、その一帶を占據する擧に出た。占領を正當化する朝鮮の議論や、それに對する明の對應ぶりを、著者は丁寧にあとづけている。これらの記述は本書獨自の部分であって、精彩に富んでいる。

第三章「楊木答兀の事件について」において著者は、十五世紀ごろの女眞社會では漢人農耕奴隸の存在は、一般的な現象ではなかったと論じる。一四二三年に建州左衛の童猛哥帖木兒などが故鄕の阿木河に歸還したとき、三萬衛（開原）千戶の楊木答兀が反亂を起こして、家族や仲閒を誘って童猛哥帖木兒とともに移住した。楊木答兀が連れ出した漢人の多くは、やがて朝鮮に脫出するが、『朝鮮王朝實錄』（『李朝實錄』）にはかれらを「被擄逃來漢人」と記述するので、從來の通說によれば、楊木答兀はかれらを奴隸にするため拉致したのであって、當時の女眞社會では漢人奴隸が普遍化していたという。しかし著者はこうした見解に、疑問を投げかける。楊木答兀に同行した漢人は、ほとんどが自らの意志で逃亡したのであり、女眞人たちはかれらを奴隸とはしなかった。さらにかれらが朝鮮に逃れた理由は、食料不足のためであって、その際に「被擄逃來」と僞って朝鮮に援助を求めたのだという。著者の論旨は明快であって、うなづけるものである。

第四章「建州衛の對外關係」は、十四世紀後半から十五世紀前半までの建州衛の歴史を、朝鮮との交涉を軸にしながら論じている。先行の研究と關連して注目されるのは、建州衛の出身地に關する新見解である。建州衛の起源は一四〇三年（永樂元）に明の永樂帝によって、阿哈出が初代の建州衛指揮使に任じられたことに始まる。阿哈出たちはこのとき、輝發河上流の鳳州にいたが、それまでどこにいたのかははっきりしない。朝鮮の史料である『龍飛御天歌』によると、火兒阿（牡丹江河口附近）であったというのであるが、著者はそれを否定して、當時建州と呼ばれた吉林地方に住んでいたと主張する。松花江の下流を占めた吾者野人が南下したのにおされて、鳳州地方に移住したと考えるのである。

著者が指摘する如く、『龍飛御天歌』の內容には不可解な部分がある。明代の女眞を代表する建州衛の先祖が、東北部の中でもそのまた邊境である牡丹江河口にいたとする記述は、納得がいかない。そもそも牡丹江河口より下流の松花江沿岸は、背後に大濕地帶を控えて、農業に適した地域とはいえない。機械力を使用することなく、人閒と家畜だけで開墾を行なうことは不可能であって、そのた

めにかつてこの地域に暮らしたのは、漁業を生業とする人びとであった。農民である建州衛の女眞人たちが、そういう地方に居住したとは考えられない。著者の問題提起は、正當であると考える。同様に猛哥帖木兒らの出身地に關しても、檢討する餘地が殘っている。

第五章「李朝初期の女眞人侍衛」では、著者は女眞人侍衛の存在を通して、朝鮮と女眞との關係の一面を明らかにする。一四〇四年（太宗四）に朝鮮の太宗が、童猛哥帖木兒の實弟などを侍衛としたのが、朝鮮における女眞人侍衛の始まりで、著者はこうした侍衛の存在を、羈縻政策の一種と考える。『朝鮮王朝實錄』によると、これらの女眞人侍衛は、建州左衛が阿木河に歸った一四二三年（世宗五）以後に顯著になるという。當時女眞人の中には朝鮮に歸化するものが急增して、一部の女眞は宮廷で侍衛となった。かれらはほとんどが下層民であって、故郷では生活できなくて脱出したものであった。朝鮮がこれらの女眞人を侍衛に採用した背景には、北邊の紛爭を未然に防ぐ意圖があった。これに對して上層の女眞人で侍衛を志願するものは、初めのうちほとんどいなかった。ところが一四三四年以降には、上層の女眞にも侍衛となるものが出始めるが、かれらの身分は一時的なもので、年をとれば故郷に歸ることもできた。こうした侍衛は人質的なもので、女眞人の離反を防ぐためであったという。論旨は明快で、說得力がある。

第六章「移住と農業」では、建州衛と建州左衛の女眞が、一四一一年から一四四〇年までの間に引き起こした九件の移住事件に關して、移住を行なった理由、およびその季節について調査した。それによると、かれらに移住を促した要因は、いずれも朝鮮・モンゴル・兀狄哈など外部勢力による攻擊であったが、實際に移住を開始した時期は、敵の來襲を受けて緊急に避難した場合を除くと、三月か四月というのが一般的であった。これらの事實は一見何の關係もないようにみえるが、それに關して著者は、移住の時期がこのふた月に集中するのは、偶然の一致によるのではなくて、意圖的に選擇された結果であると考える。女眞にとっては三月と四月は、ちょうど播種の時期にあたっており、移住先で農作業を開始するタイムリミットであったという。

第六章のもとになった研究は、「建州女直の移動問題」である。(1) 原論文と比較すると、第六章はたいへんコンパクトになっていて、論調もまたいくぶん抑えたものとなっている。こうした變化は研究の深化による當然の歸結なのであろうが、原論文がもつ着想の斬新さは、いまなお色あせていない。この論文で著者が訴えたかったことは、女眞社會の基礎は農業にあったので、女眞人の生活リズムはすべて農業のカレンダーに制約されるという事實である。女眞の生活が農業に立脚することを、この論文ほど力強く論證した研究を、わたしは他に知らない。すべての人に手本となる研究であるので、原論文をあわせて讀まれることを切望する。

第七章「兀者衛に關する研究」と第八章「忽剌溫兀狄哈の朝鮮來朝」は、海西女直の問題を扱った論文である。第七章の主題である兀者衛は、建州衛とともにもっとも早く、一四〇三年に設立された衛所である。兀者衛が朝鮮に初めて來朝したのは、一四三九年のことであるが、そのとき兀者衛の使者は朝鮮側の質問に答えて、兀者衛の場所・人口・風俗などを說明している。著者はこの史料を樣々な角度から檢討して、兀者衛について新たな問題を提起する。まず兀者衛の地理的位置に關して、新出史料の里數に據りながら、それ

に現地學者の實地調査を加味して、かれらの中心地は松花江・伊通河の西南廣元店附近にあったと論じる。著者の結論は、兀者衞は呼蘭河の流域にあったと考える通説を修正するものである。

さらにもう一つの重要な結論は、兀者衞は今日では松花江下流からアムール川中流までの沿岸に住む赫哲（ナナイ）族の祖先にあたるというものである。著者が用いた方法は、兀者衞の文化と赫哲族の文化を比較對照して、同一のものかどうかを判定するというものである。東洋史では一般的な方法に屬すが、しかし民族の交替・移住や文化の傳播・變化は、歴史上いつでも起こりうるものである。最近の研究によれば、アムール川中流と松花江下流の沿岸においては、十七・十八世紀に大規模な民族移動の波が生じて、民族分布はほぼ一變したという。[2] 兀者衞と赫哲族との間に直接的な關係がある可能性は、低いのではないだろうか。

第八章「忽剌溫兀狄哈の朝鮮來朝」は、世宗時代後半における忽剌溫兀狄哈と朝鮮の交渉について述べる。一四三二年（世宗十四）に忽剌溫兀狄哈の四百騎が朝鮮北邊の閭延に侵入して、人や家畜を掠奪する事件が發生した。朝鮮はこれを建州衞によるものとみて、翌年には一萬五千の兵を送り建州衞を攻撃している。しかしその後事件の眞相が明らかになって、一四三六年には斡朶里部の毛多赤が朝鮮の了解をえて、忽剌溫兀狄哈のもとに使いした。その結果翌三七年八月には嘔罕河衞の乃要昆と肥河衞の伐兒哥が、使いを朝鮮に派遣するにいたった。世宗はかれらを大いに歡迎したので、それ以來忽剌溫兀狄哈の各勢力がひっきりなしに來朝して、その盛況ぶりは四三年まで續いたという。著者は朝鮮に來朝した忽剌溫兀狄哈を『朝鮮王朝實錄』からピックアップして、『明實錄』と比較對照を行ない、乃要昆と伐兒哥などは、明と朝鮮の雙方に兩屬していたことを明らかにした。忽剌溫兀狄哈と朝鮮との關係は、著者によって初めて明らかにされたのであって、その功績は高く評價することができる。

第九章「土木の變と東北」は、十五世紀中葉に北アジアを席捲したオイラト部が、女眞と朝鮮に與えた脅威について論じる。これよりさきオイラト部はモンゴル平原をさらに進んで、ウリャンカ三衞を壓迫して嫩江流域にまで進出した。オイラト部に從う脫々不花は使者を朝鮮に送り接觸を試みたが、朝鮮はオイラト部に脅威を感じて、北邊の警戒を強めたのであった。一方で脫々不花は女眞の攻撃を開始したので、建州衞の李滿住はそれを避けて、婆豬江（渾江）附近に移住せざるをえなかった。オイラト部に對する朝鮮と女眞の對應が、詳しく記述されている。

さて朝鮮では十五世紀半ばクーデターによって世祖が即位したが、世祖が實施した北方政策は、前半と後半では相反する性格をもっていた。それは一見不可解なものに映るが、第十章と第十一章において、著者は事小主義という概念を提出して、世祖が行なった方針轉換は必然のものであって、矛盾なく理解できることを證明した。

第十章「朝鮮世祖の事小主義とその挫折」では、現實を無視した世祖の外交政策とその限界が明らかにされる。始め世祖は中華思想の世界觀に從って、朝鮮自らを宗主國に擬し、一方で女眞たちを藩屬國なみに待遇した。女眞に對する上京制限を撤廢して、かれらが來朝することを奬勵したので、東北國境附近にいた女眞ばかりでなく、建州三衞までも使いを送るようになった。朝鮮に來朝する女眞

の人數はその後も擴大を續けて、やがて建州左衛の首長童倉本人や、建州衛の首長李滿住の子古納哈・豆里・阿具までも來朝した。世祖は來朝したかれらを厚遇して、官職を與えるなどしている。世祖が行なった疑似朝貢政策を、著者は事小主義の名で呼ぶ。だが事小主義に基づく外交は、宗主國である明の立場を無視するものであったので、明は朝鮮に對して建州諸衛との關係を禁止し、建州諸衛にも朝鮮の招撫に應じないように命じた。この結果世祖は一四五九年（世祖五）に事小主義を放棄して、建州女直との關係を斷ったという。

第十一章「申叔舟の女眞出兵」においては、事小主義が破綻したあと、世祖は一轉して女眞人に冷酷な仕打ちを始めたことを述べる。これよりさき世祖は財政難のために女眞の來朝者數を抑制する方針に轉換し、兀良哈部の豪族浪孛兒罕などが來朝したときには、五、六名の上京しか許さなかった。朝鮮と浪孛兒罕らとの對立は、これ以後しだいに擴大して、一四五九年（世祖五）九月に朝鮮はついに、浪孛兒罕とその家族を殺害してしまった。生き殘った浪孛兒罕の子阿比車は、朝鮮に對して敢然と立ち上がり、翌年正月には千五百人餘りを率いて報復を行なった。浪孛兒罕は生前に明から毛憐衛都督僉事を受けていたので、明は朝鮮の責任を追及したが、一方では兩者を和解させようと努力する。にもかかわらず世祖は頑なにそれを拒んで、同年八月には申叔舟に命じて、八千の兵とともに越境させたのである。著者の論理は明快で、わかりやすい。

ところで朝鮮の都漢陽に上京する女眞の人數は、朝鮮初期にはとるにたらなかったが、世宗時代から增加に轉じて、世祖時代にはピークに達した。朝鮮は明の制度に倣って、これらの女眞を待遇したが、第十二章「女眞人の朝鮮上京について」で、著者はその制度的な特色を明らかにした。

一般的に言って、朝鮮が女眞を待遇した方法は明のそれに酷似する。たとえば女眞が「土物」（土宜）を貢納すると、その返禮に木綿を支給する他、身分に應じて馬・木綿などを與えていた。一方授官に關しては明との閒に、微妙な問題が存在したので、世宗は初め明に配慮して、歸化した女眞だけに限っていたが、やがて明の官職を受けたものにも、都萬戶・萬戶・副萬戶などの職を與えるようになった。世祖時代には空前の規模で女眞に官職を授けたが、明朝によってすぐに中止させられたことは、前述した通りである。他方兩國の制度が異なる場合もあった。明は衛所の女眞人に祿俸を支給することはなかったが、朝鮮の場合は世祖時代になって、一部の女眞に穀物（のちに木綿）などを祿俸として支給している。

著者は兩者の外交關係が始まった理由として、朝鮮の目的は國境周邊の女眞を羈縻することにあったが、女眞人の方は經濟的な利益にひかれたからであるという。當時の慶源市では規制が嚴しいうえに、取引も沈滯しており、そのためには上京という手段がもっとも有效であったと論じる。この分析は、第十八章でふたたび取り上げられる。

第十三章「趙三波集團」において著者は、女眞社會の內部に胎動を始めた新時代の豫感について述べる。一四六一年（世祖七）九月に兀良哈の族長百五十九人が來朝した結果、申叔舟の出兵による混亂は落ち着くかにみえたが、婆猪江附近においては浪罕兒罕の親族を中心に、實力行使に訴えるものが現われた。趙三波もまたその一人であって、朝鮮の攻擊を逃れた難民を吸收して急成長を遂げた。

朝鮮の世祖はこれらの女眞人に對して強硬な方針でのぞみ、明の和解調停にも本氣で從う意志はなかった。この間建州衛の首長李滿住は自らの保身に終始して、趙三波たちを擁護することはなかった。著者は趙三波と李滿住を對比することにより、女眞社會の內部に舊來の勢力と對立する勢力が成長しつつあった事實を指摘する。そして趙三波の集團を民族主義國家の萌芽と評價するのである。こうした論旨は第Ⅱ部の基調をなすもので、本書の特色の一つである。

第十四章「成化三年の役」と第十五章「成化十五年の役前後」では、明・朝鮮の同盟軍と女眞人が戰った二回の戰爭の原因と戰爭の經緯を明らかにする。これらの戰爭に關しては、すでに園田一龜氏が長大な研究を發表しているが、[30] 著者が新たに解明したのは、朝鮮側の對應や女眞內部の動きについてである。第十四章においては、成化三年（一四六七）の役で朝鮮が果たした役割と、その軍事行動を詳細に論じている。

第十五章では成化の戰役があった時期に、女眞社會に新しい勢力が擡頭したことに注目する。明と朝鮮の侵略を受けた後、建州三衛の首長たちはいち早く、兩國との關係修復に動く。ところが首長たちの動きを無視して、兩國に對して獨自に復讐戰を挑むものが現われて、女眞と兩國との對立はさらに激化することになった。このころ李滿住の四男李甫兒加大などは、不滿をもつ女眞人を糾合して、朝鮮の平安道北邊を襲った。甫兒加大はやがて明の攻擊を受けて壞滅してしまうが、成化十五年の役以後には高都乙赤などが登場して、朝鮮の北邊を襲擊するようになったという。

第十六章「朝鮮成宗の東京城出兵」と第十七章「阿速江衛について」は、朝鮮の東北國境外に居住した尼麻車兀狄哈と朝鮮との交渉について論じたものである。さて一四九一年（成宗二十二）正月に、都骨兀狄哈は朝鮮の永安北道（咸鏡北道）造山堡を圍んで、兵士を殺傷したうえに人畜を掠奪して去った。朝鮮側はこれを尼麻車兀狄哈のしわざとみなして、同年十月に尼麻車兀狄哈に對して、討伐の兵力を差し向ける。第十六章において著者は、朝鮮軍がこのとき經過した行程を明らかにし、朝鮮軍の目的地は東京城（渤海上京龍泉府址）であったことをつきとめ、尼麻車兀狄哈の居住地は牡丹江の流域にあったと斷定したのである。

第十七章において著者は、尼麻車兀狄哈の一部は明から阿速江衛の官職を受けていたことを發見する。阿速江衛が成立したのは一四〇六年（永樂四）のことで、かれらはその後も不定期に朝貢を行なった。一方尼麻車兀狄哈と朝鮮との關係が始まったのは、一四〇五年（太宗五）にさかのぼり、尼麻車兀狄哈はそれから朝鮮領內への侵入を繰り返して、一四三七年（世宗十九）には首長の巨兒帖哈（巨兒加介）が、朝鮮に拘留される事件を引き起こした。しかし十五世紀後半に關係を修復して以後は、毎年のように上京して、その關係は一四九一年まで續いている。

ところで當時兀狄哈部はその內部に、尼麻車・都骨・亐乙未車・南訥などの集團を含んでいたが、尼麻車兀狄哈が東京城に據ったことから、著者は亐乙未車兀狄哈は綏芬河流域に、南訥兀狄哈は嘎呀河から綏芬河にかけて、さらに都骨兀狄哈は尼麻車兀狄哈の北、現在の黑龍江省依蘭縣方面にいたと推定している。著者は論證の過程で「速平江」を牡丹江に比定するが、綏芬河の別表記とみる方が、穩當ではないだろうか。

第十八章「貂皮貿易の展開」において著者は、十五世紀末から朝

鮮では女眞からの貂皮輸入が增大したこと、これに對して女眞人たちは朝鮮から農具・耕牛を輸入して、農業生產力を發展させたことなどを述べる。朝鮮における貂皮の需要は、宮廷の一部を除いて、初めは著しいものではなかった。ただ平安道と咸鏡道の農民に貂皮を貢納させるだけで、その數量には自ずと限度があった。ところが十五世紀後半になると、中國に遲れて朝鮮でも貂皮の流行が始まって、貂皮の着用が社會現象化して、貂皮の需要を押し上げた。一方で國內の貂皮生產は減少の一途をたどり、貂皮の供給をしだいに輸入にたよるようになった。そのうえに貴族の間では奢侈がはびこって、國內產の貂皮よりも女眞人がもたらすアムール產の貂皮を珍重する傾向も生まれた。

そもそも貂皮とはいっても、毛皮として高價なのは黑貂皮である。黑貂のもっとも重要な棲息地は、シベリアとアムール川の流域であって、女眞人たちはアムール川の下流方面から運ばれる上質な貂皮を中繼して、一方では中國に、他方では朝鮮へと轉賣していた。著者は『朝鮮王朝實錄』によって、東北地區では毛皮の集散地が各地に形成されて、女眞の商人たちが活潑に往來していたことを證明した。さらに女眞人たちが貂皮と交換に朝鮮から手に入れたのは、農具と耕牛が主であって、同樣の特徵は遼東馬市でも見ることができるという。女眞人たちは輸入した農具と耕牛を使って、大いに農業の生產力を上昇させることができたが、一方において朝鮮北邊の農民たちは國家や貴族の苛斂誅求を受けて、大切な生產手段である農具と耕牛を手放さざるをえず、その弊害は非常に深刻なものがあったと論じたのである。

この論文は、東北アジアの貂皮交易について餘すところなく論證した劃期的な研究である。これによって明代女眞史の研究全體が、大きく前進したことはまちがいない。

第十九章「燕山君時代の朝鮮と女眞」と第二十章「中宗・明宗時代の朝鮮と女眞」では、十五世紀末から十六世紀前半までの朝鮮と女眞の交涉について論じる。

一四九六年（燕山君二）に建州衞の一支族金山赤下などが、平安道の渭原地方に侵入して以後、女眞人たちの侵入がふたたび激しくなった。この間朝鮮は童淸禮を使者にたてて、建州衞の首長などと會見させたが、かれらの權威はすでに低下して、配下のものすら統制できなくなっていた。そのために朝鮮の內部には出兵を主張するものもいたが、反對意見が強くて、西征はついに實施されなかった。そこでそれに代わって、國境沿いに長城を構築するという議論が起こったが、北邊に位置する平安・咸鏡二道の疲弊は、ますます深刻となっていたので、この議論もいつしか立ち消えてしまった。以上が、第十九章の內容である。

次の中宗時代になると、女眞人たちは鴨綠江の上・中流域に進出して、朝鮮との間にしばしば紛爭が發生するようになった。一五一一年（中宗六）ごろ溫河衞の女眞が閭延・茂昌地方に定住し、その後も咸鏡北道方面から女眞人が續々と移住を行なった。これに對して朝鮮は退去を要求したが、女眞人が從わなかったので、一五二四年（中宗十九）に出兵を行なった。しかしみるべき成果はなく、女眞人の跳梁を抑えこむことはできなかった。一方咸鏡北道方面では、女眞社會が毛皮貿易により繁榮したのに對して、朝鮮側の開發は進まず、これに飢饉が重なって、過疎化に一層拍車がかかった。明宗時代にも女眞の活動は引き續き盛んで、朝鮮との間に國境のあ

ちこちでトラブルが起こった。以上が、第二十章の要旨である。第十九章とともに、整理がゆきとどいて讀みやすい。

第二十一章「建州三衛の消滅と新勢力の擡頭」で著者は、建州三衛などの舊勢力が沒落した後に、新興の勢力が擡頭したことを述べて、後者の商人的な性格を明らかにし、清（後金）の勃興との關連を考える。建州三衛の首長の勢力は成化の兩役を境に凋落を始めて、十六世紀半ば以降はその系譜と事跡も失われてしまう。かれらに代わって素性の不明なものが、建州三衛の都督を名乘るようになったが、このことは明が一四九三年（弘治六）に都督の任官規定を修正して、門閥にかかわりなく實力のあるものを登用したことを反映している。しかしこうした改革にもかかわらず、都督の權威低下は避けられず、やがて都督の權威や明の後盾を認めない、或いは必要としないものが現われるようになったという。著者はその代表人物として、王杲や王兀堂、さらにはヌルハチの祖父にあたるギオチャンガ（叫場）に注目する。そして新發見の檔案に據りながら、かれが撫順馬市に出入りして貿易に從事した、商人的な性格をもった人物であることを明らかにした。新たな知見に富む好論文である。

三

冒頭に紹介した本書の目的に沿って、最後に總括的なコメントを述べて、本文をしめくくることにする。

まず朝鮮の北方外交を解明するという第一の目的であるが、大きな成果を收めたものと思う。東アジアを覆っていた中國の册封體制のもとで、宗主國明に對する藩屬國朝鮮の立場はきわめて微妙なものがあった。朝鮮は外交問題を處理するときに、いつもこの枠組みに配慮しなければならなかったが、しかしそれだけに終始したわけではなく、ときには明の警告さえも無視して、女眞に對して軍事行動に訴えたこともあった。著者はそのことを具體的な事例の中で檢證して、迫力ある議論を展開することができた。このような朝鮮の外交姿勢は、過去のあらゆる時代に通ずるであろうし、さらには當時女眞と同樣に、朝鮮の邊境問題であった日本との關係を考えるときにも、大いに參考になる。

それとともに女眞社會內部の動きも、手にとるように明らかになった。外國の侵略を受けた困難な狀況の中で、門閥を誇る衛所の首長クラスが力を失って、身分にかかわらず民族意識を高めた勢力が代わって擡頭したことが、對比的に述べられて、たいへんわかりやすかった。ただこうした勢力がこの後どう成長するのか、後述する商人的な勢力と關連するのかしないのか、敎えていただきたいところである。

次に第二の目的であるが、こちらの方も獨創的な成果につながった。著者は十五世紀後半以降、貂皮交易が盛大になったことを論證する一方、その主體として女眞社會には新興の商人階級が現われて、かれらが十六世紀末に勃興した諸勢力の中核となったと指摘するが、おそらく妥當な見解であろう。この時代における經濟交流のうねりは、想像以上に巨大であって、それを支配できるかどうかは、政治勢力の消長に重大な關係をもっていたからである。

ただしこの問題は、より廣い視野からもう一度議論を行なう必要がある。貂皮交易は確かに經濟交流の重要な一側面であるが、商人階級の擡頭をそれだけに關連させると、問題の本質を見誤る恐れがある。たとえば貂皮と並ぶ重要な輸出品であった人參に關しては、

貂皮とは獨自の流通網が成立していた。十六世紀末の遼東馬市に關する檔案によれば、貂皮を交易するのは主に開原馬市の方で、これに對して撫順馬市では貂皮はほとんど取引されず、もっぱら人參を交易していた。(4) さらに輸入品をとっても、耕牛と農具ばかりでなく、纖維製品もまたそれに劣らず重要であった。耕牛と農具はほとんど自家消費されたのに對して、纖維製品の一部は、モンゴルやアムール下流・サハリンにまで流れて、二次的な交易を生んだ可能性が強い。今後の研究では交易品の種類とともに地域を擴大して、地域間の多樣な經濟交流と、政治勢力との關連を檢討すべきであると考える。

第三の目的に關しても、多數の知見が新たに得られた。本書によって遠隔の地域についても光があてられて、空白の部分がかなり解消されることになった。

それと同時に本書は、從來等閑視された根本的な問題を提起するように思える。すなわち十五世紀の女眞社會を構成したのは、いかなる組織であったのかという問題である。たとえば十七世紀初めに存在したマンジュ五部・白山部・フルン四部・ワルカ部・ウエジ部などの地域的な結合體は、當時はまだ形成されていなかったのだろうか。これまでの研究は十五世紀に明が衛所を組織した事實に基づいて、衛所の名稱をもってそれに代えているが、本來衛所は明の漢人が女眞社會をくくった便宜的な組織にしかすぎず、それが社會の實態と一致しないことは、本書の第八章と第十七章が證明しているとおりである。この問題についても、檢討を始めるべきである。

以上要するに、本書は戰後の研究史に大きな足跡を殘すこととなった。本書の寄與するところは、實に多方面にわたっており、しかもそれぞれに個性的である。今後さらに廣範な人びとが本書を利用されて、研究の扉を開かれることを願っている。

ところで本書の書評に關しては、早くから依頼を受けていたのだが、わたくし自身の事情によって、大幅に遲延して今日にいたってしまった。そのために書評としては時期を逸したものとなり、著者並びに讀者に對してまことに申し譯なく思っている。

最後になってしまったが、著者がこれからもますますお元氣でご活躍になられることを、心からお祈り申し上げる。

註

(1) 『東洋史研究』第十九卷第二號、一九六〇年。

(2) 拙稿「康熙前半におけるクヤラ・新滿洲佐領の移住」(『東洋史研究』第四十八卷第四號、一九九〇年)、および「清代中期における三姓の移住と佐領編成」(石橋秀雄編『清代中國の諸問題』山川出版社、一九九五年)。

(3) 園田一龜『明代建州女直史研究』(續編)(東洋文庫、一九五三年)第七章〜第九章。

(4) 『明代遼東檔案匯編』(遼瀋書社、一九八五年)第一九二號檔案など。

A五判　xvi＋七六〇頁　索引四一頁　一八〇〇〇圓　一九九二年八月　京都　同朋舍出版